兵庫教育大学　研究紀要　第45巻　2014年９月　pp.1－8

おやじの会という連携のかたち
－兵庫教育大学三校園『おやじの会』の事例をもとに－

The Feature of Cooperation that is found in “Oyaji Club”：Based on the Case of “Oyaji Club” in Hyogo University of Teacher Education Attached Schools

須　田　康　之*　　宮　元　博　章*　　堀　端　優　也**　　小　林　禎　明**
SUDA Yasuyuki　　MIYAMOTO Hiroaki　　HORIBATA Yuya　　KOBAYASHI Sadaaki
長　谷　拓　郎**　　大　島　秀　子**　　青　　平**
HASE Takuro　　OHSHIMA Hideko　　QING Ping

本稿では、兵庫教育大学三校園おやじの会に焦点をあて、三校園おやじの会が、会の内部において、また、会の外部との関係において、いかなる連携のかたちをとっているのかその特徴を描き出すことを目的とした。参与観察とインタビュー調査の結果、三校園おやじの会には、１）子どものためにという大義と仲間を求めるおやじの思いの両立、２）おやじの流儀へのこだわり、すなわちそれは、外見へのこだわり、課題達成へのこだわり、挑戦へのこだわりから成る、３）「できる人ができるときに」というゆるやかなつながり、４）皆で子どもと家族を支え合うという気概、５）他者からの承認と認知、という特徴があることを見出した。おやじの会は、地域社会の現実的な課題に目を向け、仲間とともにその課題を解決し、そうすることのなかに、おやじたち自身が喜びを見出している。こうしたおやじの会にみられる連携の仕方に、地域社会の再構築の可能性があると考える。

キーワード：おやじの会、附属学校園、地域社会、できる人ができるときに、弱い紐帯の強み
Key words：“Oyaji club”, attached schools, local community, when a person who is able to do may do, strength of weak ties

１．問題設定
（１）おやじの会とは

おやじの会とは、「子育て、子供との触れ合い、教育、健全育成、地域貢献、自主学習、そして男どうしのお付き合い等を目的として、男性のみが集まって活動する、学区もしくは地域単位の団体である」（薄葉2006, p.52）。今日、おやじの会は全国に広がっており、毎年「NPO法人おやじ日本」主催の全国大会が開催されたり、各県のおやじの会が参加するサミットが開かれたりしている。おやじの会は、子どものために活動を行い、学校、家庭、地域の連携にも重要な役割を担うようになっている。同時に、近年おやじの会についての研究も徐々に登場してきている（岸1999, 川端他2006, 京須・橋本2006, 京須・橋本2007, 清水他2013）。

薄葉（2006）によると、おやじの会は２タイプに分かれる。子どもとの交流や教育を目指す「子供交流型」と、地域への貢献や地域住民との交流を目指す「地域交流型」である。本稿でとりあげる「兵庫教育大学三校園おやじの会」（以下、三校園おやじの会）は、前者の「子供交流型」にあたると言えよう。なぜなら、三校園おやじの会は、校区巡回、環境整備、運動会等のボランティアなどに加え、大がかりな装置の流しそうめん、夏祭りの屋台、学校でのキャンプ、テレビ番組を模した本格的な鬼ごっこ“逃走中”などを行い、こうした具体的な活動を通して、子どもとの交流や子ども同士の交流を促進し、附属学校園の教育活動を支援しているからである。

三校園おやじの会は、2005年、幼稚園のおやじの会として活動を開始し、子どもの成長とともに学校段階の壁を越えてその活動に広がりをみせ、幼・小・中を巻き込んだ形で発展してきた。兵庫教育大学附属学校園に通う幼児・児童・生徒の父親によって構成されるという会の特性から、おやじたちの居住地域はさまざまで、皆が同じ市町村に住んでいるわけではない。職業もコンビニ店経営、公務員、会社員、自営業等様々である。しかも、三校園おやじの会のモットーは、「子どものために」を活動の基本に据えながら、「とりあえずやってみる」と「できる人ができるときに」という「弱い紐帯の強み」（グラノヴェター2006, 宮元他2013）を合わせ持つ。無理強いせずに、来れる人が参加する自由型参加スタイルを尊重している。現在の登録者数は、およそ37名であるが、基本的に常時参加するメンバーは、20名ほどでほぼ固定されている。

＊兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻教育コミュニケーションコース　＊＊兵庫教育大学大学院学校教育研究科（修士課程）
平成26年５月９日受理

（２）おやじの会登場の背景と本稿での課題

さて、こうしたゆるやかな紐帯をもつおやじの会が、近年注目される背景には、いかなる理由があるのであろうか。

平成19年版『国民生活白書』（内閣府）では、地域のつながりが希薄化していることが指摘されている。その背景には、産業構造の変化により、かつては、治水や労働力の貸し借りをする必要があった第一次産業を中心とする社会から、今日では、その必要性がない第三次産業を中心とした社会に移行したことがあげられる。地域社会の成り立つ要件自体が変化しているのである。広井は、「日本社会は、“自分の属するコミュニティないし集団の『ソト』の人との交流が少ない”という点において先進諸国の中で際立っている」（広井2009, p.17）と述べる。今日の日本社会は、人と人の関係性が薄れ、「無縁社会」という造語までもがつくられるようになっている現状がある。

しかし、その一方で、平成19年版『国民生活白書』では、「多くの人は困ったときに助けあう関係を望んでいる」（p.84）と述べ、「地域への貢献意識は高まっている」（p.86）と述べる。確かに、産業別構成比に占める第一次産業の割合が減り、地域社会を成り立たせる要件が治水や労働力の貸し借りではなくなったが、人びとは、地域社会の中での他者との関わりを拒否しているわけではない。『国民生活白書』（平成19年版）のなかでは、むしろ、「社会の一員として、何か社会のために役に立ちたい」（p.86）という思いを、成人の６割以上が持っていると報告している。齊藤は、人びとが、コミュニティに関心を寄せる理由を次のように述べる。「（それは、）国家および市場への不信と『個人化』（Ｕ・ベック）による負荷の経験が重なるところに生じており、競争や成長に定位するのではない他者との関係や生活／活動様式を探ろうとする人々の志向を反映している」（齊藤2013, p.21）。新自由主義という過度の競争の中、自分で選択し、結果に対しては、自己責任が問われる社会、そのような社会で、人々は、地域コミュニティに希望を見出しているのかもしれない。

こうした地域コミュニティへの関心は、2011年の東日本大震災によりさらに高まりをみせた。千葉県習志野市立秋津コミュニティ顧問である岸は、「避難所として開放した学校の中では、学校と保護者や住民との協働が進んでいた学校ほど教師の負担が少なかった」（岸2011, p.113）と述べる。日頃から地域住民と協働する関係があった学校では、ソーシャルキャピタルの高いコミュニティを築くことができており、結果としてそのことが、災害時における備えとなったとして注目されたのである。

おやじの会の登場も、こうした文脈の中で捉えることができる。すなわち、現代の地域社会は、かつてのように、治水や農作業における労働力の貸し借りによって成立している社会ではない。しかし、安全に対する意識、防犯や防災に対する意識は、より安心できる地域での生活を送るうえで不可欠である。そのために、できることがあるならば当該社会の一員としてなにがしかの貢献をしたいという思いを抱くのは、自然な地域住民の感情であろう。志ある父親たちは、職場とは異なる場所で、自分たちの力を活かし、地域社会のなかで貢献する場を見いだそうとする。その一つのかたちが、学校の教育活動を支援するおやじの会であるといえよう。

本稿では、兵庫教育大学三校園おやじの会に焦点をあて、まず、その活動の概要を明らかにする。活動の実態を踏まえたうえで、そこから、三校園おやじの会が、会の内部において、また、会の外部との関係において、いかなる連携のかたちをとっているのかその特徴を浮かびあがらせることになる。おやじの会にみられる連携の仕方に、地域社会の再構築の可能性があると考えるからである。

２．研究の方法

本研究では、おやじの会設立に関わった兵庫教育大学大学院名須川知子教授（設立当時附属幼稚園長）、おやじの会代表の藤田和昌氏へのインタビュー、加えて、おやじの会メンバーへのインフォーマルなインタビューを実施した。

また、実際におやじの会のイベント「嬉望祭」、「凧あげ大会」、「反省会」に参加し、参与観察を行った。

インタビューは録画・録音をし、イベント活動は写真撮影を行った。

おやじの会の関係者へのインタビュー調査や参加した行事の日程と場所は次の通りである。インタビューと参与観察に分けて示す。

○インタビュー

2013年11月６日　三校園おやじの会代表・藤田和昌氏（藤田氏の職場）
12月10日　兵庫教育大学大学院・名須川知子教授（兵庫教育大学名須川研究室）
2014年４月16日　三校園おやじの会代表・藤田和昌氏（藤田氏の職場）

○参与観察

2013年10月23日　嬉望祭打ち合わせ（藤田和昌氏の職場）
11月12日　三校園おやじの会執行部会議（加東市社公民館実習室）
11月23日　嬉望祭「焼き鳥屋台」（兵庫教育大学）
11月23日　懇親会（加東市内の旅館）
2014年１月25日　凧揚げ大会（兵庫教育大学附属幼稚園・小学校）

３．三校園おやじの会の活動

（１）学校園への支援～補修や環境整備～

おやじの会設立の契機は、附属幼稚園からの教育環境などの整備の依頼による。依頼内容は、母親が中心になって動くPTAには依頼しがたい重労働、例えば教室の掲示板、物置き、ビオトープなどの補修、作製などである。

名須川教授は園長時代（2005～2008年）、積極的におやじの会に支援や相談の依頼をした。泥遊びできる場所を作りたい、田んぼを作りたい、予算は少ないが足置きマットを敷きたい等、相談は多岐にわたった。それに対するおやじの会代表である藤田氏の返答は、「いいですよ」、「考えてみます」という積極的なものであったという。決して「無理です」、「だめです」とは言わない。おやじの会で話し合い、おやじの人脈、もしくはおやじ自身という豊富な人材を使い、補修や作製を実現してしまうのである。知識や技術がなくても、おやじは取り組む。農業を仕事とするおやじがいる時は、畑づくりや田んぼづくりの指導を乞う。精密機械に携わっているおやじには機械の修理や使い方を習う。中学校の作業時には、技術科の教師に教えを乞う。もちろん、その道の職業者がなくても取り組む。それがおやじである。普段では取り組まないようなことに出会い、学ぶ。学校園への支援活動は、おやじたちの生涯学習の場にもなっている。

おやじたちのこのような活動は決して強制的ではない。むしろ、自発的に取り組んでいるように思われる。子どもたちの教育環境を整えてあげたいという気持ちは確かに存在するが、おやじはおやじ同士のつながりのため、つまり、おやじ自身が志をともにする仲間たちと自由に交流できる場を期待して活動している面がある。普段の生活のなかでは、他のおやじ達と関わる機会は少ない。しかし、三校園という媒体を通すことで、子どもの教育環境を整備するという大義にも適い、他のおやじたちとのつながりも持てる。この活動は、おやじにとって一挙両得の活動といえる。

（２）子どもとの活動

おやじの会の活動の中で、特に重点が置かれているのは、子どもとの活動である。具体的に挙げると、手作りの凧揚げ大会、田植え、稲刈り、もちつき、親子ドッチボール大会、“逃走中”の開催など、活動内容は多岐にわたる。こうした活動を通して得られる活動の成果には、次の３つがあるように思われる。

第一は、おやじの背中を見せる機会である。背中を見せるとは、「おやじ」を印象づけることと、感化による子どもへの教育の両方があるようだ。

「おやじの背中を見せることが一番の教育」だと語る彼らの背中には、活動時において、常に「おやじ」という文字が刻まれたお揃いのＴシャツが身につけられている。「頑張っている場面、失敗している場面、笑わしている場面など、一生懸命なおやじを見せたい、それがおやじたちの思いだ」と藤田氏は語る。そのために、おやじたちは、行事の際には、まず、「おやじ」という文字が刻まれた衣装を身にまとい、彼らの意気を示す。

おやじたちは、同じ衣装を身にまとい、自分たちが実際に活動を楽しむことによって、子どもに楽しむことの手本を見せる。行事の中で、行動力や感動を味わう姿を示して見せることで自然と子どもたちは、おやじの活動に興味や関心を寄せ、思い切り楽しむことの大切さを学ぶ。子どもたちは、家でのおやじとは違う新たな面を発見し、父親を慕う気持ちが生まれてくるようである。

名須川教授は、「子どもが中学生ぐらいの難しい年頃になったときに、それまで知らん顔していた親とは違うはず。おやじの会に参加していた親は、子どもが反発しても、理解したうえで叱ることができる。中学生の子どもたちは、これまでのお父さんの背中を見て育ってきている。」と語る。

図１．「おやじ」のＴシャツを着たおやじの会のメンバー

第二は、おやじたち自身のコミュニケーション力の涵養である。子どもとの活動において、コミュニケーションの相手は、もちろん子どもである。子どもにわかりやすく話したり、大勢の子どもの前で話したりするため、仕事場とは違うコミュニケーション力が求められる。しかし、コミュニケーションの対象は、子どもだけではない。行事を創り上げる中で、おやじ同士の話し合い、三校園との打ち合わせ、家族内の会話などが生じる。行事への参加者である子どもはもちろんのこと、保護者、三校園の教員、おやじ同士のコミュニケーションが生まれ、それらをつなぐ役割が生じる。

第三は、ネットワークの構築である。活動によって、子ども、保護者、そして、三校園とのつながりが形成される。おやじは、子どもたちの名前と顔を憶え、おやじたちは、子どもたちから「おやじ」として認識される。おやじたちは、子どもたち皆のおやじであることを望み、子どもとの活動によって、それが満たされる。

子どもとの活動により、子どもの保護者とは顔の見える付き合いができるようになり、おやじの会の認知度が上がる。三校園の教員とも、活動を通して信頼関係を築くことができ、彼らは、保護者の代表として、三校園との重要なパイプ役を担うことになる。

（3）家族との交流

活動の対象となるのは子どもや学校園だけでなく、家族もその対象となる。

三校園おやじの会の活動が広く認知されるようになったのには、おやじたちの妻（子どもたちの母親）の存在が大きい。彼らの妻の理解と協力なくしては実現しがたい活動が多くある。飲み会時の送り迎えや子どもの面倒をみることなど、おやじの妻たちは、裏方として、おやじの会の活動を支えてくれている。妻の協力なしには、おやじの会の活動は成立しないのである。

藤田氏のインタビューに次のような発言があった。「家族ありきのおやじの会」、「奥さんを敵に回してはいけない」である。それ故に、節目節目で、支えとなってくれている妻や家族に対して、おやじたちは、感謝の気持ちを示す。具体的な活動としては、夏には「親睦キャンプ」、年末には「忘年会」を行う。忘年会では、おやじたちが手料理を振る舞い、家族にごちそうをする。

親睦キャンプ、忘年会など、家族を巻き込んだ活動は、おやじにとっては子どもや家族の喜ぶ姿を見ることができる場となり、それが次の活動への意欲としてつながっていくようだ。

同時に、こうした活動は、家族間のかかわりを生み出し、他家族との交流ができる場を提供することにもなる。そこで、おやじたちは、他のおやじとその妻が、彼らの子どもに接する姿を見ることになる。それが、自分の子育てを見直すきっかけともなるとおやじたちは述べる。

名須川教授は、「おやじの会が中心になると、父親の眼が子どもとか、家庭とか、幼稚園とかに向く」と述べる。つまり、おやじの会の活動自体が、ファミリーサポートになるのである。母親の中には、「こちら（育児面）を向いてくれるだけでもいい」と言う母親もおり、「父親がおやじの会の活動に参加することによって、育児への興味・関心を高め、父親としての学びの場になっている」と語る。

（4）他機関・他地域との連携

他機関・他地域との連携活動としては、嬉望祭（兵庫教育大学大学祭）での屋台、西脇小おやじの会との交流、近畿国立大学附属学校園 PTA 連合会などがある。

兵庫教育大学の大学祭である嬉望祭では、おやじの会は毎年、焼き鳥の屋台を出店し、スタンプラリーやビンゴ大会のイベントを担当する。

図２．嬉望際での焼き鳥の屋台の様子

焼き鳥の屋台では、おやじがその主要な部分を担う。おやじの子どもたちは、主に呼び子役であるが、時に、おやじは、子どもに焼き鳥を焼くのを手伝わせることがある。おやじたちの粋なはからいである。焼き鳥は飛ぶように売れ、常に行列ができていた。おやじの会の認知度の高さを伺わせるものである。子どもたちにとっては、地域住民の喜ぶ顔を見、日常ではなかなか味わうことのできない多様な人との関わりを経験する場となる。

ビンゴやスタンプラリーでは、大学生と協働し、おやじが後ろで見守るように実施されている。おやじたちのなかには女子大生とペアを組みこれに参加することを望む声もあるようだが、そこは大人、学生を育てるためにこのイベントの企画と実施を買って出ている。おやじたちは、兵庫教育大学の加治佐哲也学長から「学生を成長させるために、学生をどんどん取り込んでいってほしい」という願いを聞き、こうした活動を行っている。おやじの会は、大学祭に参加することにより、大学祭の活性化、大学と附属三校園との連携の橋渡しを担うことになる。そのことが、地域の人々に、三校園おやじの会を認知してもらう契機ともなる。

大学祭への参加の他に、三校園おやじの会は、また、西脇小おやじの会とのソフトボールや懇親会を通して、情報交換や交流、親睦を深めている。この他、「おやじの会元気サミット in 北播磨」や「全国おやじの会サミット in ひょうご」に参加した実績がある。平成24年度には、代表の藤田氏が近畿国立大学附属学校園 PTA 連合会の理事であるため様々な会合に出席をし、PTA 連合会のスポーツ大会を兵庫教育大学附属小・中学校で開催したりもした。

他機関・他地域のおやじの会と交流していくことで、互いに触発され、三校園おやじの会のおやじたちは、さらなる活動へのモチベーションをあげることになる。加えて、地域を巻き込むことによりネットワークが強化され、おやじの会がさらに認知され、地域にも受け入れてもらえるようになる。三校園おやじの会がこれまで成果をあげてきたのは、このような「地域巻き込み型」の方

法をとることで、地域の人々に受け入れられ、認知されていったことが大きな要因であるように思える。子ども、保護者、地域、学校をつなぎ合わせることで、人の輪を紡いでいる。

（5）核となる活動

さて、これまでみてきた、学校園への支援、子どもとの活動、家族との交流、他機関や他地域との連携を、可能にさせるための核となる活動として、三校園おやじの会の、「執行委員会」、「月１回の定例会」、「反省会」を挙げることができる。

執行委員会では、役員が集まり、行事の打ち合わせを行う。仕事帰りにおやじたちが集まるので、話し合いが深夜にまで及ぶこともある。時には、お酒が入ることもあり、違う話で盛り上がってしまうこともある。おやじたちの気分転換になる場でもある。

月１回の定例会は、会のメンバーに情報を下ろし、質問をし意見を交換する場となる。設立当初は、藤田氏、副代表が話を振る一方だったという。しかし、気心が知れるようになり、定例会を兼ねる飲み会の席では、自然と話が盛り上がるようになってきた。そこでは、おやじが夢を語るようになり、「これもできるんちゃうか」、「あれもできるんちゃうか」、「よし、やろう」、「ええよ、ええよ」と実現することが多くなってきたという。PTA にはない、とにかく「やってみたらええやん」というフットワークの軽さがおやじたちには受けている。もともと、積極的に活動したいおやじたちの集まりである。おやじへのインフォーマルなインタビューでは、「PTA では時間や手間がかかるようなことが、おやじの会ではすぐに実行できる」と述べるおやじもいた。定例会は、おやじたちのアイディアの源であり、日ごろの鬱憤を晴らす場でもあり、関係を深める場でもある。

行事が終わる度に行われる反省会では、その名の通り、行事の反省、来年に向けての話し合いを行う。もちろん、会議室ではなく、宴会の場においてである。ただし、酔っぱらう前に話し合い、議事録はしっかり執られている。

三校園おやじの会では、アルコールがあるなしにかかわらず、どの場においても、冗談を織り混ぜながら、積極的に意見が交わされる。確かに、アルコールの力は有効活用されるが、飲まない人には強制しないし、飲み会に出席するように無理強いすることもない。「できる人ができるときに」という理念が貫かれている。

このような定期的な活動をすることで、おやじ同士のつながりが強化され、おやじたちのなかから自発性がうまれてくる。単に行事をして終わりではなく、反省を行い、言いたいことを率直に言い合う。学校の行事は、マンネリ化するものが多い。しかし、三校園おやじの会では、おやじたちは、一つひとつの行事に熱意をもって挑む。一旦は行事の成功を称えるが、それで終わりではない。反省をすることで、よりよいものをつくろうとする意識が、おやじたちと三校園おやじの会を成長させているように見える。

４．おやじの会の連携のかたち

（1）附属三校園の連携への寄与

さて、これまで見てきた三校園おやじの会の活動は、結果として、附属幼・小・中学校に対して、どのような影響を与えてきたのだろうか。

附属三校園には、もともと保護者が情報共有するための附属三校園連絡協議会があった。しかし、おやじの会設立以前は、幼・小・中の代表は、表面的な付き合いで終わっていたようだ。ところが、おやじの会が三校園にまでに広がった時を境に、雰囲気が変わってきたと藤田氏は述べる。情報共有が以前よりスムーズになり、附属の PTA という立場から見ても、親たちの団結を感じるようになったという。

藤田氏は、おやじの会の目標として、附属三校園の活性化をあげる。それは、藤田氏の「子どもや親、そして、先生たちが垣根を越えて盛り上がっていきたい」という言葉からもわかる。藤田氏は、三校園の連携が進んできたことがおやじの会に起因することについては、謙遜する。しかし、名須川教授は、連携を大きく前進させたのは、おやじの会であると断言した。「三校園の連携は、附属云々関係なく、難しいものであった。そのなかで、おやじの会は、PTA の旗振り役となり、三校園を舞台に活動を繰り広げる。所属しているおやじたちも、幼小中にまたがるおやじである。おやじが率先して活動を展開していくことで、附属三校園にもいい影響を与えた。」と述べる。附属三校園の連携は、連携を目的とした組織をおくことによってではなく、おやじの会の実際の活動を通して可能になったといると言える。

（2）三校園おやじの会にみる連携のかたち

三校園おやじの会は、会の内部において、また、会の外部との関係において、どのような方法で関係を築いてきたのであろうか。これまで見てきた活動概要をいま一度整理することにより、その特徴を析出してみたい。

１）子どものためにという大義名分とおやじの要求の両立

三校園おやじの会の第一の特徴は、子どものためにという大義名分とおやじ同士が関われる場を持ちたいという思いを両立させていることにある。もともとおやじの会は、附属幼稚園長の名須川教授からの相談依頼に応えるかたちで、園の環境整備を行うことから始まった。PTA に比べて、比較的自由に動くことができ、自分たちの発想で園の補習や環境整備に取り組むことができることにおやじたちは魅力を感じたようだ。この相談依頼

は、附属学校園の教育活動に役立ちたいというおやじたちの思いをかなえるものでもあった。同時に、おやじたちは、男同士が自由に語り合える場が欲しいという思いも持っていた。おやじたちにとっては、附属学校園からの環境整備の依頼は、渡りに船であったのかも知れない。なぜならば、自身の子どもたちが通う学校園に対しての教育支援ができ、かつまた、自身の交流の場も確保できるからである。おやじたちは、教育支援の活動をすることによって、ここが、自分にとって居心地の良い場であるというおやじの会のよさを改めて認識したのかもしれない。

２）おやじの流儀へのこだわり

三校園おやじの会の第二の特徴として、おやじの流儀にこだわるということがあげられよう。その流儀とは、イベントの時に身につけるＴシャツに刻まれた「おやじ」という文字にも現れている。おやじたちは、おやじの会の活動の際には、外見にも気を使う。皆が「おやじ」という文字が刻まれた衣装を身にまとうことで、一体感を高め、周囲にもおやじの会を印象づける。

おやじの流儀は、学校園からの依頼に応えることや自らが企画したイベントの実現に徹底的にこだわることにもみられる。附属学校園からの要望に応えるため、どうしたらその依頼に応えることができるかを徹底的に議論し、実現の方法を考える。自分たちだけではできない場合は、周囲の人たちを巻き込み、それを実現してしまう。おやじたちの実行力にも、おやじ特有の流儀が現れている。

おやじの流儀は、常に新たに挑戦するという気概を忘れないことにも示される。イベントを実施し、その成果を称え合うと同時に、反省することも忘れない。反省点を次のイベントでは活かし、改善へと至らしめる。加えて、何か新しい面白いことに挑戦することを常に考えている。ノルマとして義務的に事業をすすめるのではなくて、生き生きと創造的に活動をすすめるのが、おやじの流儀である。

３）ゆるやかなつながり

三校園おやじの会の第三の特徴は、ゆるやかな紐帯を大事にしている点にある。おやじの会を維持していくためには、当然、その会をリードしていく者が必要になる。現在は、会長を藤田氏が務め、副会長もおき、役員会をつくって会の運営をおこなっている。おやじの会のメンバーは、会長である藤田氏への尊敬の念を持ち、同時に、会長である藤田氏も、会のメンバーの自由な発想や自由な意見を活かすことができるよう、毎月１回の定例会では、飲み会を兼ねて自由な議論ができる工夫をしている。おやじの会では、「できる人ができるときに」という理念で貫かれており、請け負った仕事も飲み会も、無理強いすることなく、メンバーの自発性を尊重し、そのことが、おやじの会をうまく運営することができる要因となっている。藤田氏に、今後のおやじの会の存続について質問を投げかけた時に、「もしも、この会がなくなるとすれば、それはそれでよいのではないか」と答えた。藤田氏は、三校園おやじの会が、おやじたちの自由意志によって、はじめて成り立つものであることを十分に理解している。

４）おやじたち皆で子どもや家族を支え合う

三校園おやじの会の第四の特徴は、おやじたちには、おやじたち皆で地域の子どもや家族を支えるという気概を持っていることである。

清水は、おやじの会の特徴を、「父親同士がつながり、家族同士、子ども同士がつながることで、他の子どもに関心が向けられる」（清水2010, p.20）とする。確かに、この度のフィールドワークでも、同様のことが見いだされた。図３にあるように、ａのおやじと子どものかかわりは、個々の家庭の中に存在する関係である。また、ｂの子どもと子どもとの関係も、園や学校での生活の中に存在する関係である。これらは、家庭と学校という日常の中で、ごく普通に見られる関係である。おやじの会が存在することによって、新たに、ｃのおやじ同士の関係が生まれ、それに続いて、ｄの自分の子ども以外の子どもとかかわる機会が生まれる。おやじの会は、自身と自身の子どもの父親という関係を、子どもたちみんなの父親でありたいというおやじたちの願望をみたすことになる。それは、子どもとの活動を通じて実現されることになり、実際に、子どもとの活動場面において、子どもたちには、父親以外のおやじたちと一緒に楽しんでいる様子が見られた。

家族との交流も、ｄのおやじと自分の子ども以外の子どもとの関係をはぐくむ場である。「どの子どもが、どのおやじの子どもかわかるか。」と満足げに話していたおやじたちの姿からも、おやじたち皆で、子どもや家族を支え合おうとする気概が伝わってくる。

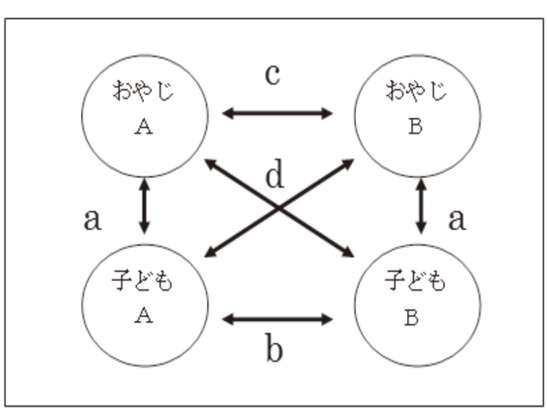

図３．おやじと子どものかかわりの次元

５）他者からの承認と認知

三校園おやじの会の第五の特徴は、おやじたちの活動が周囲の機関や地域から感謝をされ、頼りにされ、おやじの会の存在を承認されていることであろう。この場合の、他者とは、主に、兵庫教育大学附属学校園である幼稚園や小学校、中学校、大学ということになる。確かに、同じ学校園のなかにある組織なので、実際には、他機関や他地域ということにはならないのかもしれない。しかし、同じ学校園内のおやじの会に属さない人びとによって、おやじの会が、独立した信頼できる団体であるという承認を得、その活動内容に一目おいてもらっていることは、注目に値する。こうした、他者からの承認とおやじの会としての認知が、おやじの会のメンバーにとっては、今後の活動を勇気づけるものとなる。

（３）「子縁」を活かした地域コミュニティづくり

子どもの育ちを地域の皆で見守り家族同士で支えあうという取り組みは、近年、「子縁」を活かした地域コミュニティづくりとして注目されている。習志野市秋津コミュニティ顧問の岸裕司は、「『子縁』とは、子どもを通した大人同士のご縁づくりを意図的に地域社会につくりだすことにより生み出す新しい価値をもったご縁」（岸, 2008, p.32）と述べる。育児は、近所の母親とつながりを生み、保育所や病院、そして、学校などでも様々なつながりを築く。しかし、その縁は、母と子という関係の中で、母親だけにもたらされ、母親たち同士のなかで完結してしまうおそれがある。「お父さんたちは、意図的に『地域の居場所』をつくらないと自然任せではつくれない存在である」（岸, 2008, p.33）と、岸は指摘する。

実は、この問題を解決している一例が、「おやじの会」である。父親のなかには、できれば地域社会にも貢献したいという思いを抱いている者があり、同時に、男同士の仲間をつくり、家庭や職場以外にも自分たちの居場所を見出したいという思いを持つ者がいる。

三校園おやじの会では、附属幼稚園からの環境整備の要請に応じて、おやじの会を組織し、そこで、子どもが通う学校の教育活動を支援したいという父親の思いをかなえ、同時に、この目的達成のために親父たちが自由に語り合える場を準備した。きっかけは、附属幼稚園長からのリーダーと目されるひとりの人物への支援要請であった。この支援要請のために、ひとりのリーダーのもとに、志ある父親たちが求めに応じて集結したのである。こうした、地域社会のなかでの切実な要望に応じて、地域に居住する人びとが集い、自らできることを自らの頭で考え、ゆるやかな関係を保ちながら、問題解決に取り組んでいく。しかも、そこには、集う者たちにとっての楽しみが用意されている。こうしたところに、地域社会再構築のヒントがあるのではないか。

広井（2009）の調査によると、コミュニティの中心として重要な場所の一位は、学校であった。学校には、子どもがおり、子どもは新たな縁を生み出す。子どもが通う学校を核としながら、教師や保護者が地域社会に要求を投げ支援を訴える。それに関心を持つ地域の大人たちが自分の意志でそこに集い、自由に意見を出し合いながら、要望に応えていく。しかも、そこに集う大人たちには、自身の居場所も保障される。こうしたやり方の中に、今後の地域社会再構築の可能性があるのかもしれない。おやじの会が、今日の社会において意味を持つのは、地域社会の現実的な課題に目を向け、仲間とともにその課題を解決し、そうすることのなかに、おやじたち自身が喜びを見出すことができているからである。

しかし、課題も存在する。第一の課題は、中心となる人物の育成である。おやじの会がたとえ弱い紐帯のもとに形成されているとしても、組織としてのまとまりを持ち機動力を発揮するためには、中心となる人物が必要になる。秋津コミュニティには岸裕司氏、三校園おやじの会には藤田和昌氏というように、会の内部にはキーパソンがいた。地域のおやじの会ならば、職を引退し、自分の生き甲斐としてリーダー役を買ってでるおやじは多い。しかし、三校園おやじの会は、メンバーは皆、働いているおやじである。藤田氏は自営業であるから、多少の自由は効く。しかし、そのため、三校園との窓口となったり、平日のボランティアに行ったりと負担は大きい。さらに、学校との信頼関係を築くのも藤田氏が中心であり、代わりが効かない状態なのである。このように、全国のおやじの会に共通するのは、組織の紐帯を維持できる後継者の育成問題なのである。

第二の課題は、地域社会からの理解と承認を得ることである。藤田氏は、「おやじの会の活動を一生懸命にやればやるほど、周りとの温度差を感じることがある」と述べた。おやじの会のその内部は、異質な人々の集まりといえども、周囲から見れば、同質な集団である。彼らがオープンに関わろうとしても、周囲には人を寄せ付けない効果を生み出してしまうことがある。おやじの会のメンバーの絆が強まれば強まるほど、外部に与える印象は閉鎖的で閉じられた集団として映るようだ。したがって、おやじの会内部と外部の社会との関係の間で、絆とゆるやかさの両方を確保することが求められることになる。

以上、２点の課題を乗り越えた時に、おやじの会は、地域社会に根をおろし、地域社会再生のための新たなステージに立つことができるのかもしれない。

（註１）本論文は、平成25年度「教育コミュニケーション実践論」の授業における共同研究および発表をもとに加筆修正したものである。

（註２）本研究のために、ご協力いただいたおやじの会の皆様、代表の藤田和昌様、ならびに兵庫教育大学大学院名須川知子教授に感謝申し上げます。両氏に了解を得たうえで、氏名ならびにインタビュー内容を掲載しています。

【参考文献】

伊豫谷登士翁・齊藤純一・吉原直樹『コミュニティを再考する』平凡社、2013年。

薄葉　豊「おやじたちは今―おやじの会に見られる男縁の再構築―」『東北人類学論壇』（５）東北大学、2006年、52-69頁。

川端裕人、岸　裕司、汐見俊幸『「パパ権」宣言！』大月書店、2006年。

岸　裕司『学校を基地にお父さんのまちづくり』太郎次郎社、1999年。

岸　裕司『学校開放でまち育て　サスティナブルタウンをめざして』学芸出版社、2008年。

岸　裕司「地域と生きる学校とＰＴＡの新しいあり方」天笠　茂・小松郁夫編『「新しい公共」型学校づくり』ぎょうせい、2011年、89-115頁。

京須希実子・橋本鉱市「『おやじの会』と父親の育児参加（１）」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第55集、第１号、2006年、157-179頁。

京須希実子・橋本鉱市「『おやじの会』と父親の育児参加（２）」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第55集、第２号、2007年、12-25頁。

グラノヴェター・Ｍ・Ｓ、大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論　家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房、123-158頁。

清水憲志「幼稚園における『おやじの会』の機能に関する研究」『兵庫教育大学修士論文』、2010年。

清水憲志・名須川知子・藤田和昌・横川和章「幼小中連携『おやじの会』の実践と効果」『幼年児童研究』第25号、2013年、63-69頁。

内閣府『平成19年版国民生活白書』PDF 形式、2007年。

広井良典『コミュニティを問い直す―つながり・都市・日本社会の未来―』筑摩書房、2009年。

宮元博章・中間玲子・有吉美咲・石井　聡・岡本恵太・桑原英治・戸田早苗「『ゆる』概念からさぐる地域コミュニティ再構築への取り組み―加東市の事例をもとに―」『兵庫教育大学研究紀要』第43巻、2013年、1-8頁。